

(追悼文)

日本医科大学 最高の聖人、賢人、 故野村俊明名誉教授を悼む

日本医科大学名誉教授
佛教大学保健医療技術学部教授

小澤一史

日本医科大学において極めて高い良識、常識を有し、「知」を大切にし、また静かなる情熱と確固たる信念を有していた、日本医科大学最高の聖人、賢人であった野村俊明先生は約1年半の闘病を経て、とうとう黄泉の世界へ旅立ってしまった。残念という言葉を超えた大きなショックから癒えるのには、今しばらくの時間がかかりそうである。

野村先生と出会ったのは十数年前、基礎科学の医療心理学教授選考の時からである。当時、私は大学の教育委員長（現教務部長）を務めており、その関係で、基礎科学の医療心理学教室立ち上げとその担当教授選考の為の委員会において選考委員長を務めており、その選考過程において、候補者面談の際に野村先生と対峙したのが出会いである。この選考は全国公募の選考ではあったが、一方で、基礎科学分野に母校出身の医師であり、基礎科学分野という新入生を受け入れ、医学生としてのスタートにあたっての医師になろうとする学生達を誤ったモチベーションや錯覚を起こすことなく、真摯な気持ちで医学を学ぶ道に導くことの出来る人物を選考するという、いわば「条件」が暗黙の了解事項であった。そうは言っても、厳正な公募でもあり、そこはこの「条件」にある人をしっかりと見極めるといふ大きな課題があった。私は母校の東京慈恵会医科大学の教養課程時代に、慈恵医大を卒業し、生化学の助教授から当時の学長の大きな依頼を受けて、母校の後輩育成のために専門の生化学研究者から、教養課程全般の統括も含めて生物物理化学という、特別の科目の教授であり、進学課程長の役割を持って赴任していた故久志本常孝教授のことを思い出し、母校出身で医師でもあり、かつ、教養教育に大きな理解を有する人物が教養課程に存在することは極めて大きな意義を有するようになるという哲学を堅持していたので、その方針には全面的に同意であり、あとは人物だけであると考えていた。野村先生の提出された履歴書、業績などをじっくりと読ませて頂くと、日本医科大

学に入學の前に東京大学の心理学科を卒業されており、その後日本医科大学に入學され、その後、精神医学の道に進まれ、さらに法務省の医務官として少年鑑別所や刑務所の医務官を経験されており、その経歴に密かな興奮を感じた。これらの任務は人一倍根気が必要で、冷静な判断、中立性を持って寄り添う気持ちが必要なポジションであるからである。そして、大変に多忙な職務にもかかわらず、教授選考で求められる一定の業績をきちんと超える論文、著作があり、どういう人であろうか…と面談の時を楽しみにしていた。そして委員との面談の場に、野村先生は現れた。寡黙であるが、しかし、一点の曇りもない野村先生の目に、私は絶大な信頼感を瞬時に感じた。その後の選考過程での議論は何もいらず、業績、人間性、何をとつても文句なしに教授会への推薦が決まり、教授会でも絶大な支持を集めて野村俊明医療心理学教授が誕生したわけである。

当時の基礎科学は新丸子校舎であり、その体制も多少「旧態依然」の状況があり、意識改革が求められる状況でもあった。私は教育委員長、教務部長として、再三、その必要性を主張し、時には基礎科学の教員と衝突することもあったが、野村先生が着任されてからは、野村先生の冷静沈着な観察、じっくりと構えて十分に議論を熟させてから周りを納得させ、あるべき形に進歩させる見事な手腕が発揮されたことはいままでのない。前学長の田尻 孝先生の時に、鈴木秀典大学院研究科長〔現常務理事〕、弦間昭彦医学部長〔現学長〕、私が教務部長、そして野村先生が基礎科学主任という体制になり、さらに田尻学長退任後、弦間医学部長が学長となり、私が医学部長となって、大学の様々な諸問題に対処する時間が続いた。私は元来、「静」の人であったが、教授となり、様々な対応をする上で「動」の人にならざるを得ないと考え、ある意味では本来の固有の自分を捨てて「動」の演技、アクセル役を表出する決心をした。これを鈴木大学院研究科長と野村基礎科学主任という抜群の冷静で慎重な「静」の達人が時にブレーキ役という形で現在の弦間学長の初期を支えた。弦間キャビネット（7役会議）の初期は、加えて大久保公裕学生部長（耳鼻咽喉科大学院教授）、伊藤保彦教務部長（小児科大学院教授）、近藤幸尋研究部長（泌尿器科大学院教授）のメンバーであり、今とは異なり、喧々諤々の議論が行われ、各自が十分な発言を行い、十分な意見交換する体制であった。そんな中で、野村先生は基本的に「静」を保ち、最後の最後に short words のコメントをされるのであるが、これが極めて的確で重みのある一言であり、議論の conclusion となることが多々あった。私は、この流れ（皆が周りを忖度することなく責任を持って発言し、意

見交換を行う体制)がたまらなく好きで、また安心できる環境であったので、誰かの顔色を伺ったり、忖度を考えたり、政治を考える必要もなく、極めて率直な意見交換の場が構築され、教授会で大きな議論をする前に、執行部の十分な準備が出来、恐らくは学長も安心した学内運営が出来たのではないかと想像する。その土台、根幹に野村先生の存在があったことを強く伝えておきたいと思う。2019年本紀要への「紀要2019(第48号)」の中の野村先生の「紀要礼賛」の文章の中で「学術雑誌は一定の形式と内容を持たなければ受理してくれない。エビデンスレベルを高めるには対象を限定し方法を精緻化しなくては行けない。これは当然のことだが、研究者には自由な発想が必要であって雑文を書く機会があってもいい」の一文があるが、この一文に示された想い、哲学が野村先生の真骨頂であり、この考え方が様々な学内の問題解決に活かされたと思う。きちんとルールがあるのだからそれを守りましょう、でもルールは社会秩序のために必要なものではあるが、ルールに縛られ、自由な発想や行動が抑制されては行けない、という、長く刑務所において医務官を務め受刑者と対峙された先生ならではの厳しさと優しさを含有する哲学であったと思う。

野村先生は学生を大変に大切にされていた。私も大学の一番の宝は学生であるという哲学であったので、常に同じ思いで学生問題に対峙することが出来た。大学教授という智の巨像であるべき人々の中にも「学生連中」とか「あいつら」、「おまえら」、「学生を信用しては行けない」と発言する人々がいるが、私達はそれらの発言を常に苦々しく思い、「教育を語る前に、自分を教育しないと…」と言って苦笑し合っていた。どんなに痛い目に遭っても「学生諸君」、「君達」、「こんなに裏切られても、それでも学生を信用する姿勢をとり続ける」が野村先生と私の固い約束、信念であった。そして、学生との信頼関係を結べるような教育環境の構築、教育者の在り方を常に真摯に考えた。「動」と「静」のタイプの違いはあったかもしれないが、心は通じ合い、共に信じ合った親しい仲間、盟友であった。

2018年3月、医師国家試験の不振の責任をとって医学部長を辞任することにした。加えて、よく分からない筋から教授職も辞めよというような無署名の書簡も送りつけられたりして、私が日本医科大学に在職することは大学にとってマイナスになる可能性を考え、予定よりも早期の退職を考えることも教授会に伝えた。この時に、「静」の野村先生が真っ先に起ち上がり「なぜ、そこまでしなければ行けないのか。そういう思いにさせている組織、大学、教授会はおか

しいのではないか」と発言された。この発言をされた教授は、野村先生お一人だけであった。私の中では、盟友の一言で救われた、報われた、という思いが充満し、もうこれでよい、と穏やかに我が身の処し方を固く決めることが出来た。

野村先生と私の共通した趣味がクラシック音楽鑑賞であった。私の教授室でも、野村先生の教授室でも、常に流れている音楽はクラシック音楽であり、野村先生が千駄木校舎に用事があって千駄木校舎に来たとき、少し時間の余裕があると私の部屋に寄られて、多数のCDを眺めつつ、「これ、ちょっといいですか…」と興味を持ったCDを選んで、一緒にコーヒーを飲みながら、音楽談義をする時間が、互いにとても楽しみであった。定年後、ゆっくりと一緒に音楽会に行ったりしようという話をしていた最中、2020年の7月に「少し体調不良で…」という連絡を受け、その後の闘病生活が始まった。病態から考えると、少し厳しい病態であると思った。精神科医でもある野村先生は、冷静に自分の先々を見つめられ、冷静に人生の幕引きの準備を始められた。一方で、生を大切にす姿勢も淡々と堅持され、模範的患者となって主治医の指導、治療方針に従い、「小澤さん、いや～、現代の医療の進歩はすごいねえ」と話しをされていた。事実、2020年の年末に、私達の中で「春を迎え、桜を見ることが確実に出来るね」という会話をすることが出来、私も何とか奇跡が続いてほしいと願った。そんな中で、2021年9月に野村先生の最後の名著となった「刑務所の精神科医」がみすず書房から出版された。大変に素晴らしい名著であることは語る必要もないが、人間性、知的生産性、いずれをとっても高い品格のある本であった。「みすず書房」出版の意味を感じ、すぐに「いや～、みすず書房出版は羨ましい」と連絡したところ、「かつて夢中になって読んだロマン・ローランの“ベートーベンの生涯”の翻訳を出した会社なので、その点は嬉しい」と少し照れながら話されていたのがとても印象的であった。野村先生はそのご経験から法務省の受刑者からの訴えなどを吟味する調査検討委員会の委員を務めていたが、定年退職時にその役目を私に譲りたいと連絡してきた。現在その調査検討委員の一人として、毎月、法務省に向向くが、法務省内でも野村先生の存在、人間性は伝説となっており、未だに素晴らしい活躍をされたことが語り継がれている。法務省矯正局が管轄する全国の刑務所、拘置所の刑務官らに配付される「刑政」という内部冊子があるが、この中でもともに法務省で仕事をされた官僚の方（現在はとある刑務所長）が、野村先生の「刑務所の精神科医」を全国の刑務官に紹介し、そしてその早すぎる逝去を悼んでいる。

その後、2021年の11月初旬に「今ちょっと体調も落ち着いているから」とお声かけの連絡を頂き、時々「三賢人の会」と勝手に称して、教授会后に定期的に野村先生と会食を続けていた化学の中村先生と一緒に御自宅を訪ね、体調のこともあるので1時間だけ、と言っていたのにもかかわらずに結局、2時間以上も3人で楽しい思い出話をする時間を得た。帰り際に、野村先生は私と中村先生に「またね」と言いながらも、手を握って別れを惜しまれた。こんなことは今までには無かったので、病状の実態を知っていた私は、これは野村先生の暇乞いだな、と思った。その場で熱いものが湧き上がりそうになったが、必死にぐっと堪えた。中村先生と別れた後、電車の中で抑えていた感情が我慢できなくなり、慌てて下車し、駅の片隅で止まらない涙を流した。

2022年1月12日に私は武蔵境の講義室で第1学年向けの「最終講義」をさせて頂いた。この時の録画を中村教授が野村先生に送ってくださり、それを見た野村先生から「大変によい最終講義であった。自分は年を取ってから、特に医師になってから後に心を許す友人がなかなかいなかったが、先生（小澤）とは心地よい同じ思いを有する友人として付き合えて嬉しかった。その先生が4月からは日本医大にはいないということがどうしても、自分の中で納得出来ず、咀嚼できない。しかし、新しい一歩を選んだのだから、それを応援したいと思う」というメールを頂いた。これが野村先生からの最後のメール、音信であった。

1月30日（日）に私は少しゆっくりと汗を流そうと思い、熱海の温泉に向かっていた。その時に携帯電話に電話があり、電車に乗っていたのですぐにはでられず、ホテルに着いてからその番号にかけ直したところ「野村の妻です」と奥様がでられた。瞬間、全てを悟ったが「野村が亡くなり、葬儀も済みました。親しくしてくれた先生に連絡致します」というお話であった。一瞬頭の中が白くなるというのはこういうことか、という感覚であった。日曜日であったので、温泉も閑散としており一人で温泉に入り、瞑目するしかなかった。

私が、聖人、賢人というと「普段の生活を知らないからそんな美化をするんだよ」と微笑んでいた野村先生がいけないという現実を受け止めるには、私にはもう少し時間が必要である。しかし、野村先生のお陰で自らの生命も無駄にすることなく、人生設計上、いずれは京都に戻るという願いもスムーズに進んで、無事に日本医科大学も卒業して、京都の佛教大学保健医療技術学部にて medical staff である看護師、理学療法士、作業療法士を目指す学徒達に機能形態学の教育を行い、自身の生殖神経内分泌学の研究の集大成を英文誌に投稿したりして、

研究者としての duty も果たしている。佛教大学なので時々、浄土宗や法然上人の言葉の解説などのプリントを目にすることがある。その中の「心を修めたならば、安楽をもたらす」という言葉に目がとまった。いつも理知的に冷静で品位、品格の高い言葉を選び使っていた野村先生は心を修めていたんだなあ…。とつくづく思った次第である。

終わりに、改めて盟友でもあった野村俊明先生に対し、生前の多くのサポート、個としての温かいご厚情に心からの感謝を表し、冥福を祈る次第である。野村俊明先生、本当にありがとうございました。

合掌